

「ウオンツ」と「ニード」

(ヨハネ六・一四、一五；二二・四〇)

「プチツ」と小さな、しかしいやな音を立ててリビングのPCが動かない。ウンともスンとも言わない。壊れたのだ。半ば途方に暮れて「PC〇ボ」に修理に行ったのだが、修理は不可とのこと。そこで店員さんと相談したのだが、なかなか優秀な店員さんだった。最初は「買い替え」ということであれこれ勧められたのだが、途中から「どういった使い方をされていましたか」「予算は如何ほど」と言ったら、少し遠巻きな質問をするので答えた。ら、しばしの沈黙の後「それでしたら、いつそタブレットでもいいのでは」という一言が。もとにあった場所に同じようなPCを置きたい(＝ウオンツ・欲求)ことだけを考えていたのだが、一歩引いて「何をしたいのか」というニーズ(必要性)を考えれば新しい道が開ける。流石である。勿論すぐに買わなかったことは当然である。笑。

閑話休題。今朝の箇所にはイエスのもとに来た人々の具体的な欲望(ウオンツ)とイエスが満たそうとしている人間の真の必要(ニーズ)の両方が対照的に描かれている。以下それを見ていきたい。

一・群衆が持った「欲望(ウオンツ)」

前回は話したが群衆たちはイエスに期待していた。勿論これ自体が悪いというわけではない。病んでいる者が癒されたと思うことは自然であり、生活の糧を欲している人々にパンが与えられることも当然のこと。しかしイエスはそういった即時的な欲望の限界を見、「なくなる食物のためではなく、いつまでも保ち永遠のいのちに至る食物のために働きなさい。」と語られた。

群衆たちの欲望の焦点が地上に属するものであったことは、五千人の給食の奇跡の後の彼らの行動からも明らかだ。イエスの行ったしるしとしての奇跡を見た彼らはイエスをかつて荒野で父祖たちをマナをもって養ったモーセのごとき預言者だと言ひ、更にはイエスを王としようとした(十五節)。当時ガリラヤを治めていたのは元々イドマヤ人であった大ヘロデの息子、ヘロデ・アンテイパスであったが、ローマ帝国は彼に「王」の名を与えることはなかった。ローマの支配と軽蔑していたイドマヤ人の血筋の領主による二重支配の中で、民心は渴いていた。そこに颯爽と登場し、癒しや奇跡をもって彼らの願望を満たしたのだから、彼らがイエスに王となつてほしいと期待するのは別段可笑しいことではない。「イエス様を王に」という欲求が生まれたのだ。

二・イエスが見た「必要(ニード)」

このような群衆の熱狂をイエスは受け入れたらうか。「ノー」である。イエスは群衆たちを撒くかのようにひとり山に退かれ、その後、ガリラヤ湖を歩いて弟子たちに出会われて、カペナウムに戻られた。だが群衆は諦めない。彼らはイエスを王にしようとの一念で彼を探し出し、にじり寄った。イエスはどうしただろう。前回のようにならぬプリミティブな期待に応えられたらうか。否、である。イエスはむしろ彼らに真の必要を教えて言われた。「なくなる食物のためではなく、いつまでも保ち、永遠のいのちに至る食物のために働きなさい。これこそ人の子があなたがたに与えるものです(二七節)」。更に読み進めるとこの「永遠のいのちに至る食物」を与えるのは人の子たるイエスであり、更にイエスはご自身を天から下つてきて世にいのちを与えるいのちのパンである(三三、三五節)ことが解る。地上を歩かれたイエスは確かに「店食する暇もうち忘れて、虐げられし人を訪ね、友無きものの友となりて、こころくだきし、この人を見よ(讃二二・二節)」の通りのお方であった。しかし、イエスは決して群衆の欲望を無制限に叶える自動販売機にはならなかった。むしろイエスは彼らの目を覚まし、いやくらすかのように人間の真の必要である永遠の滅びから

の救い、永遠のいのちについて語られ、またそれを実現されたのである。イエスの生涯は実にその究極的かつ唯一の必要を満たすためのものであったのである。

* * *

「イエス様が人を助けたように、教会でも人助けをしましょうよ」「ボランティア活動もいいね」「もつと社会のニーズに応えなきゃ。」確かに一理ある。ローザンヌ誓約が示すように伝道と社会的参与は共にキリスト者の務めであることは言うまでもないことだ。だが今朝のイエスの態度はもう一度私たちをもう一つの場所に立ち戻らせる。それは「伝道」である。ローザンヌ誓約はこう言っている。「われわれは、教会のゲットー化から抜け出て未信者の社会の中に充滿していく必要がある。犠牲的奉仕を伴う教会の宣教活動の中で、伝道こそ第一のものである」確かにイエスは深くあわれまれるお方であり、民百姓の的外れな期待にも応えられるお方であったが、「情に掉さしや流される」と言ったお方では決してなかった。むしろウオンツの奥深くにある真のニードを満たすために自らのいのちをパンにして差し出したお方である。これこそゴスペル、福音だ。今イエスを信じよう。あなたの真のニードは必ず満たされる。アーメン。